早稲田大学大学院文学研究科紀要 第69輯（2024年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.69 (Mar.2024)

優秀修士論文概要

日本におけるアンドレ・ブルトン『黒いユーモア選集』の受容について

――花田清輝と澁澤龍彦のケースを中心に――

山　田　英　生

本修士論文は、日本におけるアンドレ・ブルトン『黒いユーモア選集』の受容を、特に花田清輝と澁澤龍彦のケースに焦点を絞って解明することを目指したものである。

序論では、日本におけるシュルレアリスム受容についての先行する言説を整理しつつ、花田清輝と澁澤龍彦における『黒いユーモア選集』の受容に論題を限定する根拠を示した。先行する言説の対象はこれまで、特に戦前におけるシュルレアリスム受容に集中してきたが、戦後のシュルレアリスム受容が日本文学史にとり重要な問題とともに織り上げられていったことを考慮するなら、戦後日本におけるシュルレアリスム受容についての研究にも意義を認めうる。他方で、このテーマについての言説の蓄積は乏しいことから、研究を開始するにあたって適切な対象として、花田清輝と澁澤龍彦における『黒いユーモア選集』受容に論題を限ることとした。

第一章では、花田清輝における「黒いユーモア」概念の受容を調査・検討した。1949年４月初出の「ユーモレスク」において花田は、「ガルゲンフモール」という特殊なユーモアの範例として「死刑囚」のモチーフを用いているが、このモチーフは『黒いユーモア』選集の序文「避雷針」から採られたものと推測しうる。この選集が45年以前にすでに輸入されていた可能性は否定できるが、瀧口修造の証言などから、49年４月以前に花田が選集あるいはその情報に接触していたであろうことが確認できる。

さらに、花田とブルトンのユーモア概念の理論設定の近似も指摘しうる。花田の「ガルゲンフモール」は、「エラン・ヴィタール」と「フラン・ヴィタール」というそれぞれ解放と拘束を司るエネルギーのあいだの均衡が一挙に崩れる際に可能になるとされているのだが、ブルトンの「黒いユーモア」もまた、超自我による抑圧と解放へ向かう欲望のあいだのエネルギーの均衡が崩されることによって発動されるとされている。

また、花田におけるシュルレアリスム受容について考えるうえで必須の観点として、瀧口修造『近代藝術』の影響がある。『近代藝術』において瀧口は、まさにユーモア概念をシュルレアリスムにとり重要なものとして紹介しており、ジャック・ヴァシェの「UMOUR」を解説した箇所には、「すべて矛盾を條件として」という表現を用いた訳文が見出されるのだが、この表現が花田の二元論的なユーモア論を導いたと考えられる。

しかし、シュルレアリスムにおけるユーモア概念の理解において、瀧口は詩的言語を、花田は現実的なものを中心的な問題として論じているという差異が残る。この差異は、『近代藝術』において翻訳されているブルトン『詩の貧困』の一節から理解しうる。この一節においてブルトンは、二元論的な理論設定を用いて「客観的ユーモア」の概念を定義しているのだが、花田はこの記述から弁証法的かつ二元論的なユーモア論と現実的なものの問題を継承していると見なしうる。

第二章では、澁澤龍彦における『黒いユーモア選集』の受容を調査・検討した。先行する言説には、

澁澤の著述家としての出発が『黒いユーモア選集』によって第一義的に決定されているという前提が共有されているが、澁澤自身による複数の証言を検討するなら、これを疑うことも可能である。このような視座から、澁澤の最初の評論集『サド復活』の詳細な検討へ向かった。

『サド復活』は『黒いユーモア選集』に収録されている各作家の紹介から始まっているが、リヒテンベルク、ロートレアモン、ペトリュス・ボレルについての記述には不自然な点がある。ここで澁澤は過剰な否定性によって無に到達してしまう弁証法というテーマを導入しているが、これに対応する記述は選集には含まれていない。しかしこのテーマは、モーリス・ブランショの『ロートレアモンとサド』や『火の分け前』など、40年代後半のサドやロートレアモンにかんして論じたテクストに見出されるものであり、両者のテクストを比較対照することで、『サド復活』の澁澤が明示することなしにブランショのテクストを参照しつつこのテーマを導入していることが実証できる。

このことは、端的には上述した澁澤の出発についての前提に対する反証であるが、同時に、澁澤に特有の手つきを発見することを可能にしもする。例えば『サド復活』におけるボレルについての記述や卒業論文におけるサドについての記述にこの手つきを見てとることができるが、『サド復活』の各章の典拠を調査することによって、この著作が『黒いユーモア選集』から採取されたサドという対象に結びつけることの可能な理論的言説を複数の典拠から収集することによって構成されていることがわかる。言い換えれば、澁澤は愛の対象に結びつけることのできる理論的言説であるならば、その正当性あるいは妥当性を問うことなしに自身のテクストのなかに展示してしまうのである。このような澁澤の振るまいはどのような欲望の体制によって可能になっているのかという問いについて考えるために、ジャック・ラカンの定式化した欲望のサド的シナリオと澁澤のテクストの構造的な類似という観点を導入した。

第三章では、「マザーグース・メロディー」、「林檎に関する一考察」、「鏡の国の風景」、「機械と薔薇」において展開された花田による一連のサルバドール・ダリ批判を調査・検討した。第一章において花田による瀧口『近代藝術』の参照を確認したが、そこで瀧口がダリの紹介において典拠としているテクストが「ラファエル前派の永遠の女性性のスペクトル的なシュルレアリスム」であることと、花田が『近代藝術』以外の瀧口によるダリの翻訳・紹介を参照していることもまた実証できる。同時に、花田と瀧口両者によるダリの「非合理の征服」の一節の翻訳を比較対照することによって、第一章においても論じたようにシュルレアリスムの受容において、瀧口は詩的言語とイマージュの問題を、花田は現実的なもののステータスをそれぞれ問題としていることがわかる。

ダリによれば、欲望に対象を巻きこみうることがその対象の物質的な実在を保証するのだが、花田はこの見解を観念論的なものとして退けたうえで、「内部」の現実を捉えるダリの方法を「外部」の現実に適用することを主張する。ここで言われていることは、花田が繰り返し引用するマルクス『経済学批判』の一節を、花田が「非合理の征服」に差し向けた批判を経由しつつ読むことでよりよく把握しうる。花田によれば、「非合理の征服」のダリは「外部」の現実に無批判に確実性を想定してしまっているのだが、マルクスの語るように、具体的なものは弁証法的なプロセスの包括あるいは結果としてしか現れない以上、マテリアルな現実は直観的な認識の地点からすれば非合理な様相を呈しうる。この読解から、花田がダリ批判において主張しているのは、確実性を伴った現実を解体し、「具体的非合理性」の横溢する現実を捉えることであると理解しうる。これら第一章と第三章での議論から、30年代のシュルレアリスムと50年代頃の花田におけるマテリアリスムの歴史的な特異性を示唆した。

第四章では、澁澤の最後の小説作品『高丘親王航海記』を題材に、澁澤の言語活動に見出される欲望

の体制とラカンの定式化した欲望のサド的シナリオとの類似を論じた。『高丘親王航海記』についての先行する言説は、主人公・高丘親王を澁澤自身の似姿として捉えるか、『高丘親王航海記』を作者から自律した小説テクストとして捉えるか、という二つの傾向に大別される。しかし、これら二つの傾向には、この小説には中心がないというクリシェが共有されており、その妥当性の問いなおしを第四章の目標とした。

『高丘親王航海記』における高丘親王の航路は、小説の冒頭と最終部において「天竺」の方角へと投げられる「何か光るもの」によって、目的地に辿り着くことのない円環として組織されるが、この構造を精神分析的な語彙を用いて読み解いた。この作業によって見出されるのは、母子の密着を回復しようとするのだが、決してそこには到達できないままに留まるファンタスムのシナリオである。この母のテーマをめぐるファンタスムを鍵に、ラカンの定式化した欲望のサド的シナリオと『高丘親王航海記』の構造の類似を指摘することができる。ラカンによれば、サドの欲望のシナリオにおいては、拷問の犠牲者を無化する地点に到達することのないままに、「永遠の苦痛のファンタスム」が展開されるのであり、サドにおける現実的なものとの遭遇とは、モントルイユ夫人によるヴァンセンヌへの投獄である。このファンタスムとその彼岸にある現実的なものとしての主体を容赦なく呑みこむ残酷な母の意志というテーマは、『高丘親王航海記』においても随所に見出される。この読解から、『高丘親王航海記』の構造はラカンによる欲望のサド的シナリオと類似しており、この小説の中心とはすでに失われた藤原薬子の身体であると結論した。また第二章と第三章の議論から、あくまでも他者性を伴った対象そのものに拘りかつファンタスムの展開に留まり続けるような、サドよりもサド的と言える態度に貫徹された澁澤の言語活動の形態を示した。

結論では、『黒いユーモア選集』の受容において、花田はブルトンによる理論的な言説を、澁澤はサドという対象をそれぞれ重要視しており、両者におけるこの差異と世代差から、戦後日本におけるシュルレアリスム受容史を構造化するための展望が開けることと、花田と澁澤における30年代のシュルレアリスムの受容と瀧口などにおける20年代のシュルレアリスムの受容を頼りに、戦前・戦後の日本におけるシュルレアリスム受容の差異を把握しうることを示唆し、今後の研究の方針を示した。